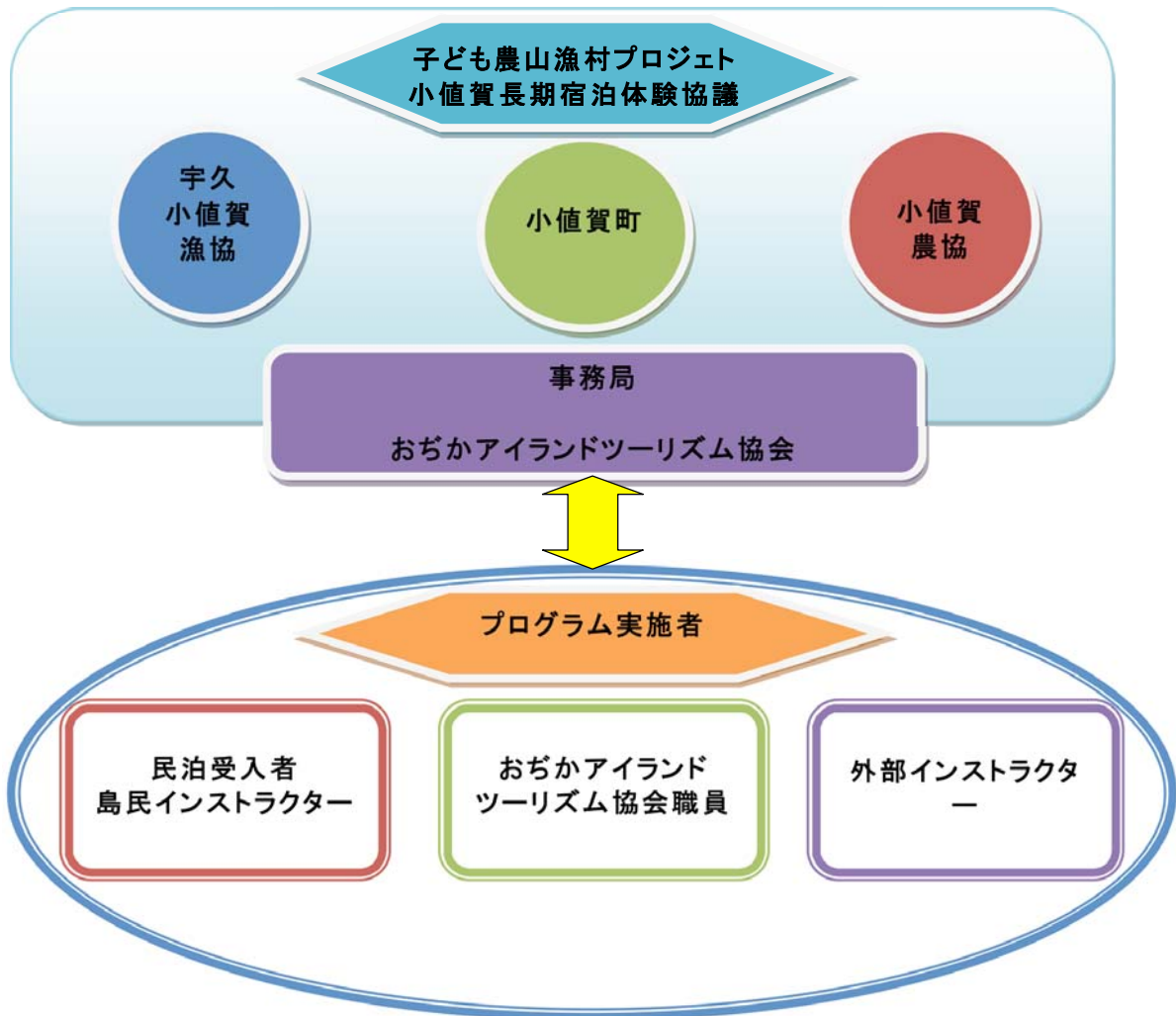


## 現状と課題の把握

### (1)プログラム実施体制



漁船にて移動



インストラクター、参加者同士の交流

## (2) 既存プログラム一覧

プログラム名	概要	特徴	課題点
トレッキング (王位石コース)	自然学塾村から謎の巨石「王位石(おえいし)」までのトレッキング。	豊かな自然環境を有する野崎島の中にあっても「王位石」は圧倒的な存在感があり、間近に接することで、古代への想いをめぐらせることができる。体力的には上級者向け	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 足場の悪い場所が多い</li> <li>・ 緊急時対応に時間がかかる</li> <li>・ インストラクターの不足</li> </ul>
野崎島 ウォーキング	旧野首教会、廃墟の野首集落や火山噴火口、シカの話など野崎島の歴史と文化、自然についてゆったりと歩く	あまり体力に自信の無い人でも楽しめる負荷レベル。世界遺産候補の教会をはじめ、野崎島の文化、歴史を感じるプログラム。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ インストラクターの不足</li> <li>・ 説明内容の統一</li> </ul>
トレッキング (舟森コース)	自然学塾村から野崎島南端(キリシタン集落)までのミニトレッキング。	体力的には中級レベル。わずか3人の移住者から作り上げられた集落で、人と自然との共生を肌で感じる事が出来る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ インストラクターの不足</li> <li>・ 集落についての資料の不足</li> </ul>
スノーケリング	野首海岸周辺での初心者向けスノーケリング。	豊かな海を全身で感じる事が出来る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現在のところ本格的に指導できるスタッフがいない</li> <li>・ 開催場所の開発</li> </ul>
磯観察体験	磯場にいる生物や自然環境を観察する。	小値賀の豊かな海を、生物や環境を通して感じる事が出来る。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ インストラクターの質の向上。</li> <li>・ 安全管理の為に機材の不足</li> </ul>
カヌー	野崎港周辺での初心者向けのカヌーレッスンとカヌーツーリング。	海を素材としたプログラムの中で、もっとも人気のあるプログラム。初級者向けであり、気軽に楽しめる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 安全の質の向上</li> <li>・ インストラクターの不足</li> <li>・ 開催場所の開発</li> <li>・ プログラムのマンネリ化</li> </ul>
各野外活動体験 プログラム	飯ごう炊飯、ネイチャーゲーム、など	対象者に合わせた、オーダーメイドプログラム。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 対応できる幅が狭い</li> <li>・ スタッフのレベル向上</li> </ul>

### (3) 既存プログラムの課題

#### 課題の把握

##### ●おぢかん体験プログラムで挙げられた課題

課題1: 多角的視点からの課題抽出

課題2: 安全管理の意識付け、救護技術の習得

課題3: 海域資源の最大活用

課題4: 海域以外の自然・人文資源の捕捉

課題5: 荒天時用プログラムの開発

課題6: 四季の魅力を活かしたプログラム開発

課題7: 環境学習重点プログラムの導入

課題8: 年間を通して実施可能なプログラム開発(⑤⑥検討過程から派生)

課題9: 地域の風土や歴史文化を学べるプログラム開発(④検討過程から派生)

##### ●課題分析票

課題1	多角的視点からの課題抽出
現状整理	・職員と一部の民泊協力者からの意見が聴取できているが、専門的なガイド等からの評価を受けたことはない
目標設定	①より多角的な視点から既存のプログラムを評価し、課題点の整理を行う ②広範な関係者、利用者からの意見、評価を得る
新プログラム等開発のポイント	①＝自然体験や環境学習の専門家等から意見を得られるよう専門家との関係を築く ②＝民泊協力者や利用者の意見を聞く方法をつくる
配慮事項	・調査対象者によって適切と思われる調査方法が選択できるよう留意する

課題2	安全管理の意識付け、救護技術の習得
現状整理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おぢかんガイドは、安全管理意識を持っているが、実地での技術は未熟である</li> <li>・民泊協力者(島民インストラクター)は、安全管理(責任意識含む)についてあまり意識的ではない。</li> <li>・主要なフィールドである野崎島は無人島であり、事故時のリスクが高い</li> <li>・定期的に救護法を受講しているが、技術、経験及び物理的条件(AED、ヘリ救助等)は整っていない。</li> </ul>
目標設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>①安全管理への意識付け強化を行う(ガイド、協力者とも)</li> <li>②心肺蘇生法や AED 使用法といった基本事項の習得徹底を図る</li> <li>③無人島等不利条件下地域の対策を検討する</li> </ul>
新プログラム等開発のポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>①＝民泊協力者の全員の安全管理の意識付け、共通認識化</li> <li>②＝応急救護のグローバルスタンダードとなっている MFA(メディックファーストエイド)の習得</li> <li>②＝フィールド観察技術を学び、危険予知能力を高める</li> <li>③＝携帯電話の通話エリアを把握</li> <li>③＝救助用の渡船が帰着できる箇所を整理</li> </ul>
配慮事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・技術や知識の習得にあたっては「最新」のものを習得する</li> <li>・実技訓練を重点とし、反復練習を行う</li> <li>・危険予測能力を高めるため、フィールド観察技術の習得を行う</li> </ul>

課題3	海域資源の最大活用
現状整理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・野崎島にてカヌープログラムを実施しているが、安全管理等に課題があることから、局所での取り組みに止まっている。</li> </ul>
目標設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海域を対象とした新規プログラム開発と運用</li> </ul>
新プログラム等開発のポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然等条件が複雑なため専門家の分析・指導を受ける</li> <li>・プログラム実施者の実地訓練を実施</li> <li>・適正な催行規模のルール化</li> <li>・緊急時対応を併せて整理</li> <li>・必要な道具の準備と管理</li> </ul>
配慮事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・風向き等の外的要因により適不適の条件が変わる場合は、複数エリアの開発を試みる</li> <li>・アプローチに労力が掛からないことを考慮する</li> <li>・練習に適するエリアの選定を行う</li> <li>・周廻コース等モデルコースの想定を行う</li> <li>・安全管理のため、プログラムの内容、実施場所、緊急対応時のお願い事項などについて協力者へ周知、依頼する</li> </ul>

課題4	海域以外の自然・人文資源の捕捉
現状整理	・アウトドアプログラムのほとんどは、拠点施設(野崎島自然学塾村)を中心に展開している
目標設定	・活用できる資源とその活用方法の発見
新プログラム等開発のポイント	・資源情報を図面化するなど、プログラム検討の際の基本情報を蓄積するシステムを構築する ・専門家、民泊協力者に加え地域住民からも情報法を収集する
配慮事項	・他地域における資源開拓についても適用できる範囲を多くするよう調査手法等を明らかにする

課題5	荒天用プログラムの開発
現状整理	・レクリエーションゲーム、講話等に対応しているが、通常の野外プログラムと比較して体験の質に差がある
目標設定	・荒天時でも実施可能であり、かつ活動を通して十分な体験印象、学習効果を得られるプログラムの開発
新プログラム等開発のポイント	・雨天下屋外プログラムの開発にあたっては、拠点施設(避難施設)の周辺で実施可能な内容のものを検討する ・荒天下屋内プログラムの開発にあたっては、屋外プログラムで得られる体験に関連したストーリー性のあるプログラムを検討する
配慮事項	選択肢の整理 ・雨点でも屋外でも実施でき、かつ避難しやすいよう拠点施設等周辺で実施できるといった安全が配慮されたプログラム ・荒天の場合は、屋内でも質が確保されるプログラム

課題6	四季の魅力を活かしたプログラム開発
現状整理	・海を最大活用したプログラムの発展が大いに期待される一方、寒い時期や荒天が続く時期は、活用できるフィールドの範囲が狭くなるという課題がある
目標設定	・四季それぞれにおける海、山、生き物などが持つ特徴を捉えて、その時期ならではの素材を活用する観点をプログラムに盛り込む
新プログラム等開発のポイント	・ありふれているからこそ普段は気付かない四季の要素をプログラムに入れて「気づき」を体験してもらい、学習に繋げるプログラムを検討する ・小値賀という土地・文化の成り立ちに結び付けていくようなストーリー展開をプログラムの柱とする
配慮事項	・汎用性を高めるため「独立プログラム」と別のプログラムに付加させて使える「付属プログラム」の双方を検討する

課題7	環境学習重点プログラムの導入
現状整理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レクリエーションスポーツをプログラムの主軸として扱っているが、一方で島の自然や文化を伝達するための要素がやや弱い</li> </ul>
目標設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習効果に重点を置いたプログラムの開発</li> </ul>
新プログラム等開発のポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・素材の抽出を行う</li> <li>・教材の作成、準備を行う</li> <li>・適切な実施場所、実施時期等の条件整理を行う</li> <li>・伝達するスキルの向上</li> </ul>
配慮事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レクリエーションスポーツを通じた体験とセットになることで相乗効果がもたらされるものがあればベター</li> <li>・一連のプログラムで「イントロダクション」の役割を果たす付属プログラムとしての役割についても検討</li> <li>・一連のプログラムの中で「まとめ」の役割を果たす付属プログラムとしての役割についても検討</li> <li>・ガイドの伝達能力を向上させるための、知識等の蓄積</li> </ul>

課題8	年間を通して実施可能なプログラム開発 (⑤⑥検討過程から派生)
現状整理	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海のアクティビティ、トレッキング等の四季にあったプログラム開発を進める一方、年間を通じて安定的に実施できるプログラムが不足している</li> </ul>
目標設定	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オールシーズン実施可能であり、体験の質も確保できるプログラムの開発</li> </ul>
新プログラム等開発のポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オールシーズン＝屋外であっても天候、寒暑に決定的に左右されないプログラムの開発</li> </ul>
配慮事項	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プログラムのラインナップを増補する役割が期待されることから、独立プログラムが適当である</li> <li>・汎用性を高めるためには場所に極端に依存しないプログラムが適当である</li> </ul>

課題9	地域の風土や歴史文化を学べるプログラム開発 (④検討過程から派生)
現状整理	・自然体験等の質的に高いプログラムの開発・実施を行っているが、ストーリー性の高い学べるプログラムが不十分である
目標設定	・おもしろい自然、文化、歴史を理解するためのプログラムの開発
新プログラム等開発のポイント	・既存のプログラムの学習効果を「自然学習」「社会学習」の観点から評価するシステムを作成する ・評価により個別プログラムでは不足している側面をプログラムの組み合わせにより補う「プログラムの組み合わせ」について検討する
配慮事項	・「プログラムの組み合わせ」について検討する際もストーリー性を重視するように心がける